

少女（中は男）が行く 海賊の世界

花びら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様のちよつと暴走で死んでしまった主人公がONE PIECEの世界に転生してセンゴクに拾われて海軍で働く物語。

転生後の名前はクモ、本来ならオニグモになるはずが少女となって生まれ変わった主人公は、時に思うがままに行動し、時に事後処理に走り、時にムカつく奴らを裏で潰す。ようは主人公が好きにしまくる話だ。

目次

第一話・原作が始まってない？ならば、
カップラーメンでも作って待ってろ。俺
もカップラーメン食べたい……（切実）

1

2話・原作はその内始まるさ。そんな事
よりも俺のペン知らない？さつきまでそ
こに置いてあったはずなんだけど……

?

第一話・原作が始まってない？ならば、カツプラーメンでも作って待ってろ。俺もカツプラーメン食べたい……

(切実)

〈海軍本部マリンスフォード〉

一人の老人が人気の無い部屋で鼾をかいて爆睡していた。

彼の名前はモンキー・D・ガープ。

“海軍の英雄”と呼ばれる男で、殆どの海軍兵士から憧れと尊敬されている。

しかし、そんなにも関わらず本人は職務をサボりまくって、今もこうしている。

仕事をしないと言うことは、その分誰かが困ると言うことで、当然彼を探しに来る者が現れる。

そして、彼の部屋を勢い良く開けた者こそが彼を探しに来た者だ。

「あ、こんな所にいた」

「む！蜘蛛娘か！」

「センゴクさんからの呼び出しです。周りに畏張ってるので逃げようとしても無駄で

すよ」

「謀ったな!」

「自業自得です。さあ、観念して下さい」

彼女の名前は、クモ。

黒い長髪でその美貌はどこか幼さが残っている。

紅い瞳で身長は160程だ。

彼女は(見た目は)年若く、彼と同じく海軍中將であり、大將候補の一人である。

そして、対ガーブ最終兵器でもある。

今日も仕事をサボっていたガーブを捕らえるよう海軍元帥であるセンゴクから頼ま
れ、ガーブを捕まえようとしていた。

彼女の拘束力は並じゃ無く、ガーブですら抜け出すのは容易ではない。

なので、ガーブは彼女が来た事で焦っているのである。

「今度飯奢つたるから、見逃してくれんかの……?」

「だったら仕事をして下さい。あなたがいないと仕事が回らないですよ。では、
”

束魔獲手^{ツカマエタ}!”

「うお!しまった!」

“海軍の英雄”のお誘いを爽やかな笑顔で断るのは恐らく彼女ぐらいだろう。

殆どの少将以下なら喜んで彼の誘いに乗ってるため、彼女程ガープを捕らえるのに適任はいないのである。

その後、ガープは黒い糸によって顔以外雁字搦めにされて、センゴクと偶然その場に居合わせた同じく中将のおつるさんから説教され、クモの手によって椅子に拘束され仕事をする羽目になったと言う……。

◇◆◆◇

「いつもすまん、あの馬鹿の面倒を見て貰って」

「いえ、センゴクさん達にはお世話になってるのでこれぐらいは当然です」

俺はセンゴクさんから呼ばれてその執務室で礼を言われていた。

え？

俺は女じゃないのかって？

そこは、お約束の異世界TS転生と言う奴だ。

俺の前世はしがないサラリーマンだったが、外回り中に運悪く車同士の衝突事故に巻き込まれて死んだらしい。

らしいって言うのは、俺にその時の記憶が無いからだ。

俺は気が付いたら白い空間にいて、そこいた自称神の爺から凄い勢いで土下座を繰り返していた。

それはもう……:ロック系のバンドのボーカルが頭を振るとき以上の勢いで。

それで何とか爺を宥めてから事情を聞くと、いつも秩序を見守ってる爺が暇潰しにとマリカをしていたら感情が高ぶってしまい、その影響が現世に出て車の衝突事故が起きてしまったらしい。

そのせいで俺が死んでしまい、この世界での蘇生以外なら何でもすると必死に懇願してきた。

何故その世界での蘇生がダメなのか。

こういう小説を読みまくっている諸君ならば分かるだろう。

え?

メタいつて?

知らん知らん。

そこで俺は、異世界転生するならとONE PIECEの世界に転生させてくれと頼んだ。

すると、爺は後ろから後光が漏れて可視化するぐらい喜んで、特典は何にするかと聞かれた。

俺は悩んだ挙げ句、最後に読んでいた『蜘蛛ですが、なにか?』に出て来た魔王アリエルに憧れて「クモクモの実」もしくは「ムシムシの実(モデル:蜘蛛)」にしてくれ

と頼んだ。

爺はこれを快く受け入れてくれた。

俺は感謝し、ついでに武装色と見聞色を覚えやすくしてくれと頼んだ。

爺は当然だと言わんばかりにこれも受け入れてくれて、あちらの世界の簡単な説明と能力の詳細、覇気の効率の良い鍛え方・扱い方を説明してくれた。

これでも記憶力には定評のあるので必死に覚えようとしたが、魂に覚えさせておくので無意識的に分かるだろうとのこと。

そして、俺が前世の記憶を取り戻すのは五歳になつてからとのこと、そこから少しだけ爺と他愛のない会話をして俺は転生した。

そこから、色々あつて――あの爺許さねえ事件も起きたが――センゴクさん達に拾つて貰い、俺は海軍にいる。

最初は海賊もいかなかったが、なるべく原作ブレイクはしたくないのと海軍から追われるのは嫌だと言うことでこの位置に着く事にした。

センゴクさんに拾つて貰ったのは7歳の時で、今の俺の年齢は37。

……見た目は十代後半なのに、年齢だけが過ぎていくのは何故だろうか…？

それからあつという間に年が経ち、どういふ訳か強くなりすぎて中将という化け物クラスの實力を持つ奴らしか就けないような地位に俺はいた。

自分でもこんな小娘をそんな所に置いといて良いのかとセンゴクさんに聞いてみた
ことがあったが

「問題無いだろう。私が認めたんだ。なら、他の奴らは文句は言えないはずだ」
とのこと。

元帥に認められたと思って良いのかな?

けど、素直に喜んで良いかは分からなかった。

そう言えば、俺の名前について何も言っていなかったな。

俺の名前はクモ。

そう、エニエスロビー編のバスターコールで出て来たあの人の女性版です。

厳つい顔でかなり長い髪を分裂させて手のように操り、それで本来の手を合わせて武
器を8本も持つてるあの人の成り代わりです。

まさか………クモクモの実疑惑がある人に転生するとは思ってなかったよ。

しかも、女て……。

俺が何故分かるかって?

それはね、バスターコールにて出て来るオングモ以外の中将四人は確認できたのにオ
ングモだけがないんだよ。

全兵士一覧を一週間掛けて読み漁ったがその名前がいなかったのだ。

どういう事だ爺？

オニグモって確かモモンガとたいして見た目の年齢差無かったよな？

転生の特典で不老でも付いたのだろうか……？

やつべえ。

既に原作ブレイクしてる気がしてきた。

あ、もうしてる？

まじかー。

そういや、私の部下は原作に出て来る奴もいればいなかった奴もいたな……。

いや、この話はまた今度にしよう。

どうせこの後少なからず会うんだし。

俺はセンゴクさんから礼を言われた後、少し雑談してからセンゴクさんの執務室から

出た。

そこから向かうのは自分の執務室だ。

確か軍費の予算案について増加申請があつたな。

まったく勘弁して欲しいよ。

こちとら『王下七武海』の奴らが暴れるせいでそもそもの予算が削れてんだよ。

本当、巫山戯てるわ……。

◇◆◆◆◇

彼女はオークモの生まれは特殊だった。

彼女は一人っ子だが7歳まで優しい両親と近所の人々と一緒に平和に暮らしていた。

しかし、その平和は人の欲望に感嘆に壊されてしまった。

何でも欲深い商人が彼女を奴隷にしようとする傭兵を雇い入れ、彼女が住んでいた村を襲わせたらしい。

その理由は彼女が悪魔の実の能力者だったからだ。

動物系 ゾン 幻獣種 ムシムシの実 モデル “アラクネ”、それが彼女の食べた悪魔の実。

彼女の主な能力は、糸と蜘蛛の眷属化、アラクネ形態への変身。

この中で最も厄介なのが、蜘蛛の眷属化。

これは野生の蜘蛛の意志問わずに己の眷属にしてその蜘蛛が得た情報を共有できるらしい。

そのせいで助かったこともあるが、逆に知りすぎてしまったこともある。

まだ、あの事を知られていないのは僥倖だが、それも時間の問題だろう。

その時はその時で何としても海軍に縛り付けなくてはならない。

まあ、彼女が海軍に不利益なこととは思わないと思うが……。

閑話休題。

彼女は幼いときにそれを偶然食べたらしく、その能力を有効に使って村に多大な貢献をしていた。

しかし、それが村を襲わせる原因になってしまい、結果は村は壊滅。残ったのは彼女一人。

そこを担当していた海兵の話ではその場には少女の上半身と黒い蜘蛛の下半身を持つ化け物が、足元に血の池を作りその場に佇んでいたらしい。

その場の海兵はそいつを捕縛・無理なら殺害しようとし、行動に移った。

しかし、並の海兵では瞬殺され、その指揮官であった大佐もものの数秒でやられたという。

偶然その場にいた中将二人がかりで取り押さえようとしたが、それでも力及ばず撤退という結果になった。

その時に私は初めてその少女の存在を知り、恐怖を覚えた。

何故ならその内の一人の中将は自然系の能力者で、ロギア武装色でないと対処できない筈の状況を簡単にひっくり返したのだから。

私は危機感を感じ、当時同じ大将であったゼファールと一緒にその島へ向かうことにした。

ガーブは天竜人の護衛任務があつて、連れてくる事が出来なかつた。

そして、私たちはその島へ着き、部下を置いてゼファーと二人だけで言われた場所に向かつた。

そこで私たちが見たのは正真正銘の化け物だつた。

上半身は少女、目は虚ろで焦点が何処か合つてなかつたが、下半身は巨大な黒い蜘蛛で赤い八つの複眼に鎌のような前足、口の横に鋭い牙を携えていた。

そいつは私達を見つけると真つ先に襲い掛かつてきた。

そこから丸一日にも及ぶ激闘の始まりだつた。

結果で言えばこちらの辛勝だつた。

本来なら部下も連れてくるべきだつたのだろうが、私は危険と判断して私とゼファーとの二人だけでここに来て良かったと初めて思った。

恐らく例え連れてきたとしても残つていたのは私とゼファーだけなのは目に見えていたからだ。

何故なら、その時の私とゼファーは体中至る所を骨折しており、血だらけになつていたのである。

止めはゼファーの黒腕による全身全霊の一撃“インパクトバスター”によつて刺され、化け物はそこで意識を失つたのか横に倒れた。

すると、化け物の下半身が蒸発するように萎んでいき、元の幼女の下半身の姿へと元通りになった。

その時に見えた少女の顔はどこか泣いていた。

私たちにその姿は親を見失った迷子の子供のように見えた。

そこで、私とゼファーが真つ先に思い浮かんだのは彼女を放置でも処分でもなく、保護することだった。

本部に戻った際には、一刻も早く殺すべきだと意見が上がったが、大将二人の意見であつても納得できるものが少なかった。

しかし、ここで予想外の誰も予想してなかった事態が起こった。

なんと、「五老星」が生かすべしと味方に付いたのである。

理由は、まだ子供でありながら強大な力を持っているなら今の内に調教して海軍に引き入れるべき、とのこと。

そんな理由で納得した者が多かったが、私にはなにか別の理由があるように見えた。

なんせ、普段の「五老星」なら処分すべしと判断してもおかしくなかったからだ。

しかし、その時はじたばたしており、今すぐには聞きに行けなかったが、最終的には彼女を保護する事に成功した。

最初は村を助けられなかった海軍を嫌っていたが、私達の説得によつて一部の者だけ

の指示だけ聞くことで了承してくれた。

あの時の説得は本当に大変だった。

なんせ私たちが海軍だと分かるはずすぐに能力を使用したからな。

その時は優しく取り押さえて説得、その後心を開かせるために海軍本部の中を見学させたり、多少の交流を深めさせるために人柄の良い人や人格者との会話を最優先とさせてきた。

その結果、今となって彼女が心を開いてくれたのは……私が知っている限り……私ことセンゴク、コングさん、ガープ、ゼファー、おつるさん、クザン、モモンガの人だけで、彼女の部下でも片手で数えるほどにしか心は開いていなかったな。

しかし……クザンはまあ分かるとして、モモンガに懐くのは予想外だった。

あの男は非能力者だがバスターコールに呼ばれる程の実力者で、自分にも厳しく他者にも厳しいことで有名だ。

それなのに、彼女が彼と笑っている姿が目撃されることが多々ある。

過去に一度、モモンガにそういう趣味なのか聞いてしまったことがあるが、その瞬間だけは本気で斬られるのでは思ったほど否定された。

迂闊に聞いた私が悪いのだ。

これ以上彼の不評に繋がるようなことは避けよう。

閑話休題。

彼女が一番心を許してる者と言えば、基本行動を共にしてのおつるさんだ。別部隊とは言え、彼女はどんなことよりもおつるさん優先にするからな。

そこだけは本当に困った。

けれど、ゼファーとおつるさんが本気で鍛えて、導いてくれたおかげで彼女は海軍にいてくれるのだと私は思う。

彼女が海軍に多大な貢献をしてきているのは助かってはいる。

とは言っても、彼女は偶に問題を起こすが、クザン・サカズキ・ホルサリーあの三馬鹿程じゃ無いから助かってはいるが……………。

本当、あの子が海軍にいてくれて良かった……………！（切実）

あの子が海賊になったらと思うと……………ん？

そんな未来があつたら……………？

……………ダメだ。

もしそんな事になってしまったら私がストレスで死んでしまう。

いや、私だけじゃ無いな…。

おつるさんは確定として、下手すればゼファーもやられてしまう。

ふう……………。

まさか、ここで新しい問題が出て来るとは思わなかった。

何としてでも彼女を海軍にいてくれるようにしないと…。

しかし、やり過ぎるとバレてしまうからな。

さて、どうしたものか……。 (切実) ※本日三回目

そういえば……彼女はあるときから見た目が老けてないような気がするが……気のせいだろうか……? ◆◆◆

許さねえ……!

ミホークの野郎、海軍の軍艦ごと海賊船を斬りやがった!

なんで、あいつの悪行のせいで俺が苦勞する羽目になるんだよ!

今度センゴクさんに頼んで一発殴らせて貰おうかな、マジで。

俺がそう心の中で愚痴っていると、部下の一人がそつと俺の机にそつとコーヒーの入ったマグカップを置いてきた。

俺はそいつの顔を見ながらお礼を言う。

「ありがとう、ライラ」

「気にしないでください。どうせ、七武海絡みの問題なんでしょう?」

彼女の名前はライラ。

彼女は私と同じ黒髪で、碧い瞳の美少女だ。

彼女は昔、闇オークションから抜け出した所を私が保護したのだ。

保護とは言っても、見た目がタイプだったから誘拐のほうがちk……ゲフンゲフン、俺が保護した、おけ？

彼女の部署が、センゴクさんが手を回してくれて私と同じ部に入れてくれたのは本当に感謝だ。

そんな彼女を拾ったのは五年前なのに、既に大佐にまで昇進してる。

それもそうか、彼女能力者だし。

彼女はムシムシの実モデル百足。

体の一部もしくは全体を百足に変化させる事が出来る。

しかし、私のようにその系統の虫を眷属化する事は出来ないようだが、代わりに意思疎通ができる。

私のは蜘蛛達が集めた情報が勝手に脳内に入ってくるからな、意思の疎通が必要ないのだ。

やろうと思ったことは無いが。

彼女が大佐にまで昇進した理由は、彼女が初めて捕らえた賞金首が億越えだったのが大きい理由だろう。

確か『小指切り』のザースという二億八千万の大男だったな。

何でも海賊・海軍挙げ句の果てに市民、自分に負けた者の小指を切り落としてはコレクシヨンにするという真性のサイコパスだ。

彼はたまたま遠征の途中だったライラに目を付けて、戦闘を吹っ掛けたらしいが結果は返り討ち。

とは言っても、ライラの方も辛勝だったのだ。

百足の装甲のおかげで致命傷は避けられたものの、全身包帯だらけで最低限戦えるようになったのは一週間後になるほどだ。

能力者は自己治癒力が高いのか、非能力者と比べるとその回復力はかなり早い。

実際、彼女が完全復活したのは一ヶ月後だったしな。

それにしても、彼女の初めての戦闘にしてはぶつ飛んだもので、そこで政府の上層部に目を付けられたらしく、彼女の昇格速度がそこの海兵よりも早いのだ。

俺の可愛い部下に色目使うとは……許せんなく。

そういや、ライラ以外にもウチの部下に色目使ってたな……。

乗り込む以外に今度、別の方法で報復しとくか…。

「おいおい、また悪い顔になってんぞ、姉御」

「ん?なんだ、帰ってきてたのか。ガスパーデ」

ガスパーデ。

劇場版 ONE PIECE の中でも古い作品に出て来た男で、確か、その時はとある島を根城にオリキャラの少女とその家族にかなり酷いことをしていたな。

あの時は俺も「何て野郎だ……」とは思ったが、まだ原作が始まってないためにまだ海軍いたので様子見したら、劇場版の時程人格は最低じゃなかったんだよ。

眷属の蜘蛛を数匹彼に張り付かせて一ヶ月もの間、彼を観察した結果、彼は出世欲が大きいだけなのだ。

しかし、彼の傲岸不遜な態度から周りから勘違いされやすく、密かに海賊と繋がっているのでは無いかと日々囁かれている。

センゴクさん達も多少は疑っていたために、その噂が本当かどうか、情報収集に関しては右に出る者がいない私を呼び出してまで問い質された……………。

センゴクさん自身は俺のことを疑ってなかったらしいが、その周りの海軍のお偉いさん達が納得するまで私の報告は終わらなかった。

正直に言おう。

あの時は、本当に面倒くさかった。

主にサカズキ。

俺が会議室に入ってすぐに俺の正体に気付き突っかかってきたのだ。

単純にうるさかったのとあの時の恨みもあったので、常人なら即刻逃げ出すレベルの皮肉と侮蔑の籠もった言葉をマシンガンの如く、しかも敬語でデイスりに走った。

案の定、サカズキはキレだし、俺はゆえ……面白くなってきたので更に煽って、サカズキがとうとう実力行使で私を黙らそうとしてきたところで二人揃ってセンゴクさんに怒られた。

野郎、マジ許さねえ……。

閑話休題。

結果で言えば、ガスパーデは白ということになった。

大きかったのは、センゴクさん、ガープさん、おつるさん、クザンさんという会議室の中でも発言力が大きい人達が俺の言葉を疑ってなかったことだろう。

そのおかげで俺の報告を疑う者が減り始め、反対派はサカズキの一派のみとなり、俺の報告は無事終了した。

恐らく、その時が切っ掛けとなったのだろう。

サカズキが度々俺に突っかかってくるようになったのだ。

まあ、俺はその度にデイスったり表で美辞麗句を並べるも、少し考えれば裏では皮肉つてることが分かる言葉をぶつけたがな。

最近となつては、あいつも俺のことをデイスり初めてはいるが……フッフッフ、人

を苛つかせる達人に勝とうとする姿は正にゆえ……微笑ましい。

ダメだ、超ウケるww。

「なんだとはひでえな。任務の帰りがてらにセンゴク元帥から呼び出しくらってよ」

「なにー？また厄介ごと？」

「いんや……と言いたい所だが、よく分からん」

「それはどういう事でしょうか？」

何だろうか？

ガスパーデが持つてくる大体は護衛か面倒事だ。

ちなみに面倒事とはサカズキの野郎が裏で手を回して俺をどうにかして失墜させよ

うと並の海兵では死ぬような難しい依頼のことだ。

まあ、俺はそれを難なくクリアするために逆に信用が上がってくのだ。

サカズキザマアwww。

閑話休題。

そんなガスパーデがよく分からない依頼というのは今までに一度も無かったため、ライラも耐えきれず聞いてしまうほどに不思議なことなのだ。

ライラと俺が疑問符を頭に浮かべると、ガスパーデがその内容を口にします。

「今回の依頼は『とある島の調査』だそうだ」

「は?」

「え?」

「気持ちには分かる。俺も最初はそうだった」

「センゴクさんからは?」

「伝書を預かってる。これだ」

「ありがとう」

「ガスパーデが懐から数回に折られた紙を取り出し、俺に渡してきた。

俺はライラと共に、その内容を見る。

『今回これを君に頼むのは筋違いなのは分かっている。

しかし、名のある海賊達がそこに行つたきり戻つてこないらしいのだ。

中には億越えもいるとの報告もあった。

そこで政府から海軍が調査に赴くように命令されて、調査隊とその護衛達でその島に

向かうことになった。

だが、結果は音信不通。

護衛の中にはナザール中将等がいたにも関わらずだ。

彼らの生存はあまり期待しない方が良さだろう。

彼らには申し訳ないことをした。

結果を聞いた政府は再度調査申請をしてきており、現在その調査隊の編成が上手くいっていないのだ。

大将クラスを連れていけば信用があるのだが、大将を連れて行くには理由が小さいために政府から却下された。

そこで、大将にも引けを取らない実力を持つ君に白羽の矢が立った。

君だけでも問題ないだろうが、一応グループも付けておくので安心して欲しい。

君たちが護衛と聞けば募る有志も多いだろう。

報酬も満足できるものを約束しよう。

本当に申し訳ないが、この依頼を引き受けてはくれないだろうか？

良い返事を期待してる。』

んー、これはセンゴクさんも結構焦ってるな。

いつものセンゴクさんの依頼ならグループさんを付けるなんて有り得ないからな。

……………何かあるのだろうか？

しかも政府の依頼か…………。

なら間違いないがあるな。

いや、いるのか？

まあ、いいや。

それは後で考えられる。

俺はライラに今ここにはいないがあの二人も呼ぶようにと、ガスパーデに行く部下を調整して貰うように指示を出した。

そして、俺はセングクさんの元へ向かった。

時間はまだ夕方、この時間帯ならまだ執務室にいたはず。

今までの経験則からそう予想し、その予想は当たることになった。

「おお!クモか!それで、返事は…?」

セングクさんは入って来た俺を見て開口一番に

「勿論受けますよ」

「それは助かる!本当にありがとう!」

「気にしないで下さい。それより、詳しい説明をお願いします」

「うむ、分かった。まず、日時に関し手だが……」

◆◆◆

プルプルプル プルプルプル、プルプル…ガチャ

「もしもし、こちらライラ」

『ん?ライラか。珍しいな、そつちから掛けてくるなんて』

「ええ、あの人から頼まれたので」

『ほう、けど俺がいなくても充分なんじゃ?』

「それは、今回行くのは未知の島。政府や海軍も少なくない犠牲を出してるようなので、あなたにも来て欲しいのです。それに……好きなんでしよう? 未知の島へ行くのは」

『マジかよ……。よし分かった。今マリリンフォードだよな?』

「ええ」

『ならそつちには三日着く。それまでに準備を終わらしとけよ』

「無論、そのつもりです。では」

ガチャ。

「あの人の番号は確か……」

プルプルプル、プルプルプル、プルプルプル、プルプルプル……ガチャ。

「もしもし、こちらライラ」

『ライラちゃん、こんにちは。早速だけど用件は?』

「未知の島へ行く調査隊の護衛についてです。そちらから来れそうですか?」

『ごめんなさい、行けそうに無いわ。こつちも別件で手が空かないのよ。その代わり、今度ご飯奢つてあげると伝えておいて。勿論、あなたも一緒よ』

「フフツ、ありがとうございます。それじゃあ、伝えておきますので、無理しないで下

さいね。それでは」

『ええ、そちらもね。じゃ、バイバイ』
ガチャ。

「……………残念です。久々に全員揃えると思ったのに……………」

2話・原作はその内始まるさ。そんな事よりも俺のペン知らない？さつきまでそこに置いてあつたはずなんだけど……………？

「〃月歩〃で行った方速くない？」

「全員が〃月歩〃を使えてたら話は別ですが、現実はその甘くないので我慢して下さい」

海軍が所持する軍艦の甲板で俺は愚痴るも、ライラに一蹴された。

だって実際そうじゃん！

全盛期のガープさん程じゃないけど、俺も長い間〃月歩〃で行った方が速いんだぜ？しかも、俺が先に行つて危険度を測つてきた方が良いじゃん。

それを伝えると、

「極度の方向音痴が何ほざいてるんです？」

辛辣！

否定できないけど！

俺ってばゾロ並みに方向音痴らしいんだよ。

人を頼りに見聞色使って元には辿り着けるけど、一人だとわからなくなるんだよな！

あれ?

ゾロも見聞色使えば迷子も治るんじゃないや……?

いや、二年後も治ってなかったな。

ということは、あれは真性の方向音痴ということか……?

んー、ダメだ分かん。

どうやったら治るんだろうか?

「ほら、これでも食べて落ち着いて下さい」

「わくありがと〜!」

「ちよ、だ、抱き着かないで下さい!」

ライラが出したのは彼女特製のクッキー。

特製というのは毒が入ってるからだ。

俺はどうも毒にはかなり高い耐性があるらしく、毒はもはや食べ物認識になってる。

それが発覚したのは、確か体の成長が止まったのが19の時です。それから三年後だから、22の時にインペルダウルの視察に行ったときか。

俺が行ったとき、偶々囚人が暴れてたのでマゼランがそれを鎮圧しようとしたときに彼の能力である毒が俺の口の中に入ったのだ。

多分、『何アレ!? すっげー!』って叫んでたせいだな。

それで思わずそれを飲んでしまい、隣にいたライラとガスパーデが必死に『ぺっしなさい! 出来ないなら今から手を喉に突っ込んでぺっさせますから!』『ライラは一回落ち着け! それだと下手の物まで出て来るぞ!』とか叫んでたのは覚えてる。

しかし、次に発した私の発言によりその場が凍ることになる。

『マズ……』

まさかの不味かったのだ。

そう、彼の毒は不味かった。

それを聞いたライラは色々と乱心して俺のことを揺さぶってきて、ガスパーデに羽交い締めで離されるまでやめなかった。

その時、毒に詳しい人がいたので調べて貰うと、それらしき症状は俺には出ていなかったらしいので俺の安全は保証された。

ちなみに、俺にマズいと言われたマゼランは俺に一言謝ってから壁の隅っこで体育座りでかなり落ち込んでいた。

かなりシニールだったよ、あの画は……。

なんたって、その姿を見たその場の全員の顔が引き攣っていたんだから。

それから俺は度々毒の味について調べていたら、ライラも百足になれるのでその毒を食べてみたところ、一番美味しかった。

次に水銀、その次に青カリだったな。

だけど…………一番不味かったのがマゼランの毒だったのは謎だったなあ。

「相変わらず姉御は謎の体質だよな…………」

「ハッハッハ!流石は姉貴だぜ!」

俺が毒入りクツキーを食べてると少し離れた所からそんな声が聞こえた。

一人はガスパーデ。

俺が毒入りクツキーを食してんのが未だに謎らしい。

俺自身が蜘蛛だから耐性持ちでもおかしくは無いだろ。

もう一人、こちらを見て愉快そうに笑ってるやつの名前はヴェーリ。

金髪の短髪で碧眼。

身長は二メートルを超えるほどで褐色肌の大男だ。

ちなみにこれでも少将である。

彼は元々とある島の部族で、俺がそこに迷い込んだ祭に彼に喧嘩吹っ掛けられたので

返り討ちにして以来なぜか懐かれたので部下として雇う事にした。

そしたら以外と有能だったので——彼の希望もあり——各地を転々としてる。

彼自身が世界を見てみたいと言うもんだから希望通りにしてみたところ、以外と評判が良かった。

それから、最初はよくいたヴェーリは本部に戻ってくるのが少なくなり、常駐している私やライラ、ガスパーデと共にいることが少なくなっていた。

そのことにガスパーデは問題ないようだったが、ライラはちよつと寂しそうにしてた。

それもそうか。

元々騙されて身売りされかけた身の彼女にとっては心を開ける相手というのは少ない。

俺に拾われた当初も挙動不審な上に疑心暗鬼で、誰とも喋ろうとはしなかったからな——。

え？

俺？

まあ俺も少ない方だと思っけど、ライラはそんな俺よりも少ない。

まず俺にガスパーデ、次にヴェーリともう一人に加えてセンゴクさんとおつるさんの6人だけだ。

だから人付き合いが苦手だし、人間関係も少ない。

特に知らない男が近くにいると基本真顔と無言が多いため、地味に不気味がられる。

それに女の子とは話すことはあるが必要最低限しか喋らず、彼女に友達とい概念そのものが存在しないほどに俺ら以外の女の子と話してるのを見たことが無い。

一度友達を作らせてみようかなと思っただが、ガスパーデに『姉御は友達いるのか?』と聞かれ、俺は呆気なく撃沈し、その企画は中止となった。

今となつては古傷を開くような思いでしか無いわな……。

閑話休題。

常駐組じゃ無いもう一人に関してはまだ今度語ろう。

そして、なんやかんやで、俺がライラをイジつたりロー（見た目は）女同士なのでセクハラにはなりませんー、ヴェーリと組み手したり、ガスパーデに実験したり、とそうこうしてる内にその時は来た。

「失礼しますークモ中将、例の島が見えてきました!」

一人の海兵が俺の部屋の前でそう報告してきた。

やっとか。

隣に走る調査船の機械・道具確認や人員確認も終わって暇だったので丁度良かった。

他の奴ら？

多分書類整理か訓練じゃね？

最後にライラと一緒にいたときに書類整理してくるつつて別れたからそうなんじゃ無いかと思つてる。

俺は伝えてくれた海兵を簡単に労い、全空間に繋がる通信機で全員に十分後甲板に来るように伝えた。

そして十分後、甲板に全員の集合が終わった。

ちなみにガープさんの部隊は調査船を挟んだもう一隻の軍艦の方になるのでここにはいない。

………来たら来たで返すけど。

そんな事より、俺は甲板に集まった海兵全員に聞こえるよう、大声で告げる。

「総員、心して聞け！今から我らは危険度の高い未知の島へ突入する！そのため無駄な行動は避け、被害を最小限に抑える事を第一優先とせよ！計画はまず最初に私の部隊が先発隊として安全を確保するので残留組はここで警戒を最大限にして待機！無駄な犠牲を出さないためにも速やかに協力してくれ！最後に！誰一人として死ぬな！見殺しも許さん！良いな？」

『イエッサーッ!!』

「馬鹿かお前ら! イエスマムだ! 何故間違える!？」

『イエスマムツ!!』

「はあ……それでは島に着くまで解散!」

最後はぐだぐだになったが、まあ良いか……。

さあて、準備でもしましょうかねえ。

◆◆◆

俺は今回、名のある海賊や調査しに来た海軍の軍艦が次々に消えていく未知の島へ行くことになった海兵の一人だ。

今は海軍艦にて警戒態勢に入っている。

最近少佐に昇格したばかりだが、その矢先に任務がこれとは付いていないのかいるのか分からないものだ。

分からない理由は、これから危険に突つ込むと言うのにどこか安心してる自分がいるからだ。

なんせ化け物クラスと言われている中将が数人もいると聞いたからだ。

一人は言わずもがな『拳骨のガープ』。

「海軍の英雄」とも呼ばれる人で、その実力はこの『海賊王』を何度も追い詰めたことのある程だ。

最近、力が落ちてきたとか言ってるがどこが落ちたのか未だに分からん。

その証拠に一度手合わせをする機会があったが、全く手も足も出なかった。

いや、その時は確か俺以外にも大佐や准将クラスの奴もいたが、そいつらも瞬殺されてたな……。

それだけで全盛期がどれだけ凄かったのかが分かる。

……絶対に相対したくないがな。

もう一人は『天網のクモ』と呼ばれる女の中将だ。

その名の由来はその道のプロすら凌駕する情報収集能力と獲物を確実に逃さずに確実に捕まえる事から付いたらしい。

俺は一度もあの女の戦闘力を見たことも味わった事もない。

一度手合わせしたところのある同僚から聞いたところ、

『あの人はもはや人間じゃねえよ……。お前も体験すれば分かるさ……。』
と、怯えるように言っていた。

一体何をされたらそこまで震えるのかが分からなかったが、かなりの実力者なんだろう。

閑話休題。

今出した二人の中将以外にも詳しい数は聞いていないが何人かいるらしい。

………中将は意外と暇なのか?

まあそんな事、今はどうでも良いか。

しかし、警戒態勢で巡回とは言っても軍艦の中や外を歩き回るだけだからな。

ハア、暇だ…。

そんな事を考えてる内に、俺はいつの間にか甲板に出ていた。

今回の目標である未知の島が少しずつだが、その全体が見えてくる。

砂浜が見えるが、その近くに廃船とかした軍艦や海賊船が見える。

どうやら噂は本当みたいだ。

言うなればこの島はまさしく無人島だ。

しかし、どういう理由でどいつもこいつもいなくなつてるんだろうな。

人を呑み込めるような化け物でもいんのかね。

俺が島について考えてると、後ろから肩を叩かれた。

振り返ると、そこにいたのは

「やあ、君は最近少佐に昇格したばかりの………君だね」

黒い長髪の真紅の瞳。

外見年齢は20代前半の女だった。

それは、クモ中将だった。

馬鹿な…。

ここに来るまで一切の気配を感じなかったぞ。

それ抜きにしても何も聞こえなかった。

つまりだ。

これだけで実力の差が分かってしまう。

悔しいが、それが現実だ。

「どうかしたのかい？」

俺が黙ってるのを不審に思ったのか、クモ中将が再度声を掛けてくる。

「申し訳ございません。少し呆けてました」

「そうか。あまり緊張するなつてのは無理かも知れないけど無茶はするなよ？それを

するのは私らの役目だからな」

「ハッ！」

………中将としてはそれはどうなのかと思うが、何も言わずに俺は大人しく従う。

しかし、思ってたよりも全体的に柔らかい女だな。

噂だと20年ぐらい姿が変わってないと聞くが本当だろうか？

聞いてみたい気持ちはあるが、女性に年齢を聞くほど恐ろしいことは無いからな（経

験談）。

「今変な事考えてなかった?」

「いえ、何も」

「そうか…。ならいい。お勤めご苦労、しつかりこの艦を守ってくれよ。それでは」

「ハッ!」

そう言うと、彼女は去って行った。

そう言えば、何故俺みたいな下っ端同然の俺に話し掛けてきたんだ?

俺よりももつと話すべき奴はいると思うが……。

……………まあ、命令だ。

しつかりとこなしてやるさ。

◇◆◇◆◇

やって参りました!

未知の島!

お家帰りしたいです!

え?

ダメ?

知ってたよ畜生!

俺たちがいるのは、今回の任務の目標である未知の島の砂浜。

一回、外周を回ってみただけで止まれそうな場所がここしか無かったのでガープさん達を待つてる。

先発隊は私の部隊であるライラ、ガスパーデにヴェーリ。
後は数人の部下。

そこにガープさんの部隊が加わって今回の任務が遂行される。

調査隊の人達は私たちが安全を確保するまで出ないように厳命してある。
だつて下手に死ねばこちらが責任持たなきゃいけないからね。

「おい、クモ。こつちも終わったぞ」

ふとそんな声が聞こえてきた。

その声の方向を向くとガープさん……と……と……?

何であの人がいんだ!?

「東魔獲手!!」

「うおわ!」

俺の五指から黒い糸が飛び出し、その人物を捕まえる。

その人物は諦めたように大人しくし、ガープさんは必死で口笛を吹いてる。

出来てないけど……。

「説明を求めます。答えなかった場合は今までの悪行をセンゴクさんとおつるさんに

報告します」

「お前さん儂にだけ辛辣すぎないか!」

「普段の行動を振り返ってから言つて下さい。それで……………何で、クザンさんがいるんですか?」

そう、俺が驚いたのはガープさんの右後ろ辺りを歩いていたクザンさんを見つけたからだ。

彼の部下から偶々聞いたけど、確か今日の予定は書類処理だったはずなのだが…………?

「実はな…………押し切られてしまつての…………」

「いや、なに負けてんですか!?!そして、クザンさんはなに押し切つてんですか!」

「前に…………ちよつと借りを作つてしまつての……………」

「こんな面白そうなイベントを俺が見逃す無いでしょうが」

「開き直つてんじゃねえよ…………!とりあえず…………二人は本部に戻つたら覚悟しとけよ…………?」

『ひえ……………』

「…………(クモ中将が…………いつも使つてる敬語を使つてない……………!あのガープ中将とクザン中将が怯えてる!)(…………)」

(本当に何したらあそこまで怯えられんだ?)

「少なくとも今は安心して下さい。今すぐには追い出さないので。それに、戦力は多い方が良いですからね」

『はい……………』

（（（（すっげーしょんぼりしてる!?!）））））

（……………もう驚かねえぞ）

「それでは、出発だ！元氣を出していこう！」

『ハッ！』

（二名ほど元氣でてないのは良いのだろうか？）

「あ、ちよつと忘れてた」

『?』

みんなが俺の言葉に疑問を抱いたが、俺は気にせず始める。

「……………!」

「……………なにをしてんだあれ？」

「俺らに分かるわけ無いだろ」

「にしても何も聞こえねえな。なんか喋ってたんだろうけど」

……………俺が何してるかって言うと、歌ってる。

そう歌ってたんだ。

しかし、これは蜘蛛にしか聞こえない声で、超音波による信号みたいなものだ。

俺がこうする理由はもうすぐ分かる。

「な、なんだアレ!?!」

「黒い塊、イヤ違う!アレはなんかの群れか?」

「よく見ろ……!アレ全部虫の蜘蛛だ!」

「まさか、あれら呼び出してのか!」

部下の反応から分かる通り、俺はこの島に在るであろう蜘蛛達に砂浜に集まるように信号を送っていたのだ。

そして集まったのは、戦闘に立つ一番デカイタランチュラのような蜘蛛を筆頭に大きな順に私の前に大量の蜘蛛達。

俺の能力は見ただけで眷属支配が完了するので、一匹ずつ終わった順から森に帰っていく。

今回は四百ちよいか、ちよつと少ないけどこの島なら充分か。

「ハツハツハ!これは久々に見たのう」

「俺は未だにちよつとぞわつとしますがねえ」

ガープさんとクザンさんは別々の時だが前にもこれを見ており、初めて見た時の反応はとても良かった。

その後怒られたけど……。

閑話休題。

蜘蛛の眷属支配し終わり、情報収集するためにみんなにここで少し待つ旨を伝え待つ事にした。

く十分後く

暇だったので、ヴェーリと共に が下つ端海兵達をしごいていた。
ライラ、ガスパーデはちよつと軍艦の方で待機して貰つてるらしい。

ただし受けた奴らは死屍累々としてるがな。

「あららあ、見事なまでに屍とかしてんな」

「ワツハツハ！ まだまだじゃな！」

どこかへ行ってたクザンさんとガープさんが戻ってきた。

どうせ能力不使用の模擬戦でもしてたんだろうな。

俺は情報収集がだいたい終わったのでそれを伝えようと

「流石だねえ。もう見つかつたのか？」

「なんじゃ、すぐに帰んのか？」

クザンさんは何か期待して、ガープさんはなんかがつかりした。

まだ内容は伝えてないんだけどなあ。

「そうがっかりしないで下さいガープさん。恐らく後数日はここにいる羽目になりそうですから」

「それはどういう事じゃ?」

「私が行ったのは表面上の調査だけでまだ詳しい所までには手が届いてないんですよ」

「へえ、クモちゃんでも手こずる所があったのかい?」

「ええ。でもちよつとおかしな所がありましたね」

「?」

「この森って奥に行けば行くほど危険地帯になってるんですよ。それもかなり歪でして」

「歪とは?」

「そうですね……。見た限りだと、死体すら残らない猛毒沼エリアの隣に食人植物であらう巨大な植物が蠢いていたり、大量の蟲が跋扈するエリアの隣に人の数倍は大きい猛獣達が争わずに過ごしていたり、とかですね」

「…………んむ?」

「つまり、色々おかしいということか?猛毒沼なら食人植物のエリアに何故か浸食せず、その逆でも食人植物が猛毒沼エリアに浸食しないのは不自然。そして、もう一つ、

大量の蟲がいるというのなら、その中にも間違はなく肉食の蟲は存在するはずなのに猛獣達はそちらに行こうともせず自分達側で普通に過ごしてるのは不自然。と、言いたいんだよな？」

「全く以てその通りです。そこまで言われるとは思いませんでしたが、更に付け加えて簡単に言うと、まるで中央のエリアを守っているように円上に危険エリアが広がっていつてるんです。それも中央に行けば行くほど危険度も上がっていつてます」

「……それは、どういう判断でそう決めたんじゃ？」

「私の眷属支配した蜘蛛はある程度私の命令に従うようになってるんです。だからその蜘蛛達の総合的強さ、毒耐性の強さ、身体能力の高さ、技術力の高さで個別に分けた蜘蛛達にそれぞれの危険エリアに行つて貰い、その結果で判断しました」

「そうか。それで……何人必要だ？」

「能力者は全員ですね。六式使いがいたらその人もお願いします。後はそれぞれの部隊から引き抜いた精鋭を」

「それなら大丈夫じゃ。そこらにいるのはお主より遥かに弱いがそれなりの精鋭じゃ。六式の全てでは使えないもののいくつかは使える者ばかりじゃ」

「彼らも伊達に死線を潜つてきてはいないってこと。そんなじゃ、クモちゃんの作戦はどういうやつなんだ？」

「私の考えてる事なんて作戦と呼べるものじゃありませんよ。ただ、クザンさんがそこら一带を凍らして解けないうちに駆け抜ける。これだけです」

「俺らも頭使うのは苦手だからなあ……」

「俺も無理じゃな!」

「そんな開き直らないでください……」

「別に良いじゃないの。そんな事より、クモちゃんの一番安全なエリアってどこだい?俺には全て危険に聞こえんだけど?」

「それはですね……」

◆◆◆

「ここが最も凍らせれば安全な場所、食人植物エリアです」

俺たちは無人島の今言ったが、食人植物エリアの入り口付近に立っていた。

しかし、その奥に見える景色を見てライラが感想を言う。

「姉さん、明らかに安全そうには見えませんが?」

そりやそうだ。

気配を消してるとはいえ、○ツクンを進化させて首が増えた上に更に凶悪な見た目の奴がうようよいるんだからそうなるよね。

俺も怖い。

だが、部下の前でビビるなんて有り得ない。

「大丈夫大丈夫。ここは蟲や獣たちなら冷気耐性もあるんだけど、ここは植物共はど
うやらそれがないらしいからね」

「本当に便利な能力だな」

そう呟いたのはクザンさん。

俺もその意見に同感だ。

眷属支配した蜘蛛は個体差はあるものの知能がかなり上がる。

平均で五、六歳の子供レベルにだ。

殆どの蜘蛛が鳥——人間の三、四歳程度の知能を持つ——より頭良いんだぜ？

しかも最高だと成人レベルで頭が良い奴もいる。

そいつは俺もなるべく失いたくないから、滅多に出さないようにしている。

出すとしたら、俺が対処不可能の窮地に陥ったときぐらいだろう。

「自分で言うのもなんですが、私もそう思います (≡ω≡) b」

「自分で言っちゃうかあ。しかもドヤ顔が可愛いから画にな r……」

「判定、黒。処刑します」

「落ち着こうね、ライラ。私でも視認できないスピードでクザンさんに覇気纏った刀

を押し付けないで」

「俺……………刺される?」

「そりゃそんな生活してたらな。刺す奴は特定されてるけどな」

「お前さんら、いつまで遊んどるのじゃ?そろそろ始めるぞ」

巫山戯たやり取りをしていると、ガーブさんから作戦の開始を促されたので早速始める事にした。

食人植物を達をクザンさんが簡単に凍らせ、食人植物達は此方に気付くことなく、停止した状態で固まっていた。

その隙を突いて俺たちはそこを全力で走る。

とは言っても、一般海兵とかもいるわけだから、全力で走ると差が出てしまうのである。

置いていくわけにもいかず、何とか合わせて走る。

それから少しして、俺たちは目的の場所に辿り着いた。

そこには何もなかった。

森なのは分かるが、気配を探しても何も分からなかった。

そこにあるのは木々が生い茂るだけで、それらしき人や獣の姿もなかった。

「なんじゃ、何も無いではないか?」

「ん〜?」

「おかしいですね……。……。何かあると思ったのですが……。……。」
「姉貴、なんか嫌な予感がする」

ガープさんやクザンさんが不思議に思い、どうしようかと悩んでたところ、ヴェーリがそんな事を言ってきた。

彼の感は元々山育ちのせいか、見聞色より鋭いときがある。

しかも、その確率が十分の九なので、皆に警戒するように声を掛けようとしたとき、そいつが現れた。

「総員退避!!」

咄嗟に叫んだが、全員避けきれたとは言えなかった。

何人かがそいつの着地による衝撃で吹き飛ばされ怪我を負ってしまった。

俺はそいつらを一瞬で手から糸を出して回収し、後ろの方へと置く。

そして、目の前を見た。

そいつは黒紫色の肌……。甲殻を纏っており、両脇にある巨大な鋏をカチカチと鳴らし、後ろから生えてるであろう巨大な尻尾はこちらに向けており、その先端には鋭い棘がある。

もしかしくなくても、蠍だ。

大きさは、クザンさんの2倍ぐらいか……？

だが、全体的な大きさで言えば、軽く三メートルは超えてるであろう、巨大な蠍が今にでもこちらへ牙を?かんとしていた。

それよりも、どつから現れたんだ、こいつ……………!!?

「なんじゃこいつは!?!デカい蠍じゃのう!」

「虫は寒いのに弱いんだろ?なら、アイス・エイジ氷河時代」

クザンさんが能力で蠍を凍り付けにした。

クザンさんはヒエヒエの実を食った氷結人間。

氷雪系悪魔の実の中でも最強クラスの力を持つそれは、発動する度に常に絶対零度の冷気を纏う。

クザンさん未満の実力者がその力を喰らえば、まず自力での脱出は不可能だ。

そして、クザンさんの能力を以てしてその例外を見たこと無かった海兵の一部は、もう大丈夫だと安心しきっていた。

しかし、その例外は目の前で起きることになる。

パリーイン!

凍り付けにされた筈の蠍が自力で氷を破ったのだった。

「ばかな!?!」

「嘘だろ…!」

「あいつ、相当ヤバいぞ……………」

海兵達はそのことに混乱していた。

かく言う俺は、最悪のパターンを考えていた。

もしかしたらこいつは—————!

「キシヤアアアアアアアア!!」

「ぐっ!?!」

そう考えてる内にクザンさんに蠍が襲い掛かっていた。

本来なら、クザンさんは自然系なのでどんな攻撃をしようともその体に効かない。

ただし、その中にはいくつか例外があるが、その内の一つが武装色の覇気だ。

体を黒く染め、鎧のような効果を発揮するものだが……………: 蠍はそれを纏っていた

……!

クザンさんはそれを見極め、必死で退避する。

そこをガープさんがなんでか上から降りてきては巨大蠍の背中に拳骨を喰らわせた。

「フンッ!」

「キシヤアアアアア!!」

よく見たらあの蠍全身に武装色纏ってるじゃねえか!!

しかも、かなりの練度だ。

「ガープさんの攻撃は効いてるようだが……………大したダメージにはなっていない、たぶん。」

その後にはライラが百足に変身し、ヴェーリは蠍螂に変身して襲い掛かる。

「はあああああ!!」

「面白え!相手してやるよ、蠍野郎!」

ヴェーリはムシムシの実モデル「蠍螂」の能力者だ。

彼は島にいた頃から悪魔の実を食っていたが、使わずに島の頂点に立っていたのだから、彼の戦闘センスには驚かせてもらってばかりだ。

「キシヤアアアアアアアア!!」

「ギイイイイイイイイ!!」

「キュアアアアアアアア!!」

上から巨大蠍、ライラ、ヴェーリです。

ライラが蠍の体を巻き付き、ヴェーリがその間から前足の鎌で蠍を斬りつける。

しかし、蠍にはそれらの攻撃が効いていないように見える。

ガスパーデは能力を駆使して他の奴らのサポートに周り、クザンさんとガープさんとライラにヴェーリが攻撃の要となっている。

俺はさっきからあいつらの援護をしてる。

ヘイトを集めたり、前線から離脱させたり、そんな感じで立ち回ってる。

このまま行けば問題はないだろうが………違和感を感じる。

なんで……この巨大蠍しかないんだ……？

恐らく、こいつに今は戦略を立てられる程の知能は無いはずだ…。

なのに、なんでこの島はあれ程人工的に作られたようになってるんだ……？

はっ！

まさか………！

そう思った刹那、ライラの体が爆発した。